

## 学芸員の研究発表など

### 事例報告「『ブラックホールを見た日～人類100年の挑戦～』の製作」

石坂千春(学芸員)、ブラックホールを見た日製作委員会  
日本プラネタリウム協議会 全国研修会(2020年10月20日)

アインシュタインの一般相対性理論による予言から、ブラックホールの直接撮影成功までの人類100年の挑戦を描く全天周作品を製作していることを報告した。

2019年4月、世界一斉に発表されたブラックホールの直接撮影成功は、200名以上の世界中の科学者たちが結集したイベント・ホライズン・テレスコープEHTの成果であった。この作品には、EHTの日本チームを率いた本間希樹・国立天文台・水沢VLBI観測所所長にもインタビュー出演していただいた。

### 研究論文 自然現象と対話するサイエンスショー

斎藤吉彦(館長)、吉岡亜紀子(科学デモンストレーター)、上羽貴大(学芸員)  
博物館学雑誌 第46巻第1号(2020年10月31日)

サイエンスショーは、科学ネタを用いたエンターテインメントで派手な演出で喜びを与えるのが主流である。遊園地やびっくりショーなどの喜びと大同小異である。あるいは、教示形式で退屈なものも少なくない。本稿では、これらとは本質的に異なるものとして、科学者と同質の感動を与えるサイエンスショーを提唱した。見学者が、自らの思考の下に自然現象を観察することで、発見の感動を味わう、そのようなサイエンスショーが可能であることを、著者の実践に基づいて論じた。

### 依頼論文「科学館における歴史的実験機器の活用」

吉岡 克己(総務企画課)  
日本物理学会誌 Vol.75, No.11, 2020 (2020年11月5日)

本稿は、日本物理学会から、地域にゆかりのある物理の歴史的遺産を現代の教育普及に活かす試みとして事例紹介を依頼され執筆したものである。内容は、吉岡が2017年から取り組んだ旧制姫路高等学校物理実験機器資料群の調査研究をもとに、当該資料群の概要と価値及びその科学館での活用事例である。

特に、地域の歴史的科学資源の公開意義について、歴史的資料を地域住民の記憶に残すことの重要性並びに、そのために果たすべき科学館の役割及びその方法を論じた。また、歴史的実験機器が持つ、当時の研究者の工夫を伝える力の価値についても提案した。